

第 部 感染症とその他リスク

1. 新型インフルエンザなどの感染症

(1) 概要

感染症とは

感染症とは、細菌やウイルスなどの病原体が体の中に入って増殖し、咳や発熱、下痢などの症状がでることを言います。感染症を予防するには、ウイルスや細菌の感染経路をよく知り、感染経路を絶ち、体内に侵入させないようにします。

2009 年には新型インフルエンザが発生し、世界的な大流行を巻き起こしました。感染症が発生すると社会に大きな影響を与えることがあります（図 2）。ここでは、新型インフルエンザをはじめとした飛沫や接触感染により感染する感染症の対策についてまとめました。

✿ 新型インフルエンザ

新型インフルエンザとは、インフルエンザウイルスのうちヒト - ヒト間の伝染能力を新たに有するようになったウイルスを病原体とするインフルエンザのことを言います。通常のインフルエンザと同様、飛沫感染と接触感染が中心と考えられています。

新型インフルエンザをヒトが経験したことがないために免疫を持っておらず、それゆえ多くのヒトが感染して世界的な大流行（パンデミック）を引き起こす可能性があります。

2009 年に新型インフルエンザ(A/H1N1)が発生しました。「弱毒性」といわれていますが、流行が 2 ～ 3 度繰り返され、感染力や毒性が強まる可能性も否定できません。また、現在鳥類の間で流行している、毒性が強い鳥インフルエンザ H5N1 がヒト - ヒト間で感染するように変異することが懸念されています。

✿ SARS

SARS は Severe Acute Respiratory Syndrome という英語名の略で、日本語では「重症急性呼吸器症候群」と訳されています。新しく発見された感染症で、2003 年に中国大陆を始めとする多数の国や地域で多くの感染者と死者を出しました。急な発熱、咳、息切れ、呼吸困難などの症状がみられます。症状のあるヒトからヒトへと飛沫感染や接触感染すると考えられています。また、特別な条件下での空気感染なども完全に否定されてはいませんが、可能性はかなり低いと考えられています。

✿ ノロウイルス

ノロウイルスは冬季を中心に発生する感染性胃腸炎の原因となるウイルスです。感染性が非常に強く、ヒトへの感染経路は、主に経口感染（食品、糞口）でごく少量のウイルスでも感染します。嘔吐、下痢などの急性胃腸炎症状を起こしますが、その多くは数日の経過で自然に回復します。近年、ノロウイルスによる感染例が増加しています。ノロウイルスを含む糞便や嘔吐物を処理後、手に付いたウイルスが口に取り込まれ感染することが多いようです。

海外で発生すると・・・



渡航自粛



水際対策を強化



海外の研究者等の受け入れ困難



海外から借用する資料の遅延等



海外出張の中止



国際会議やシンポジウムの中止

国内で発生すると・・・



地域封じ込め



特に流行している地域の博物館の来館者の減少
閉館措置やイベント中止の要請



感染者が発生した博物館等で風評被害の恐れ
閉館していることへの批判

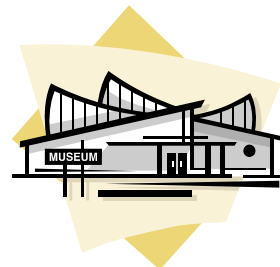
毒性が強い感染症が国内で大流行すると・・・



公共交通機関の運航本数が減少
流通機能の低下（遅延、サービスの中断）



食料品・餌、生活必需品
が入手しにくい



来館者の減少



多くの感染者が発生



職員や委託業者等の欠勤率が増加

図 2 感染症発生による影響の例

対策のポイント

感染の拡大防止のためには、事前の対策や感染者に対する早急な措置等の適切な対応が求められます。新型インフルエンザのヒトへの感染経路は通常のインフルエンザ同様接触感染、飛沫感染が想定されています。SARS は飛沫感染が中心であるとされています。ノロウイルスは経口感染と接触感染が主な感染経路とされています。

■ 主な感染経路

■ 飛沫感染

感染者のくしゃみや咳により口や鼻から飛び出す飛沫（水滴）にウイルスが含まれ、約 1 ～ 2 メートルまで浮遊し、感染していない人が飛沫を吸い込むことで感染（飛沫感染）します。

飛沫感染を防ぐには感染者から 1 メートル以上距離を保持する、感染者がマスクを着用する等により、飛沫を吸い込まないことが必要となります。全ての人がいわゆる「咳エチケット（P16 参照）」を心がけることが重要です。

■ 接触感染

ウイルスが付着したものをふれた後に目、鼻、口などに触れることで、粘膜・結膜などを通じて感染（接触感染）します。感染者がくしゃみや咳を手で抑える、鼻水を手でぬぐうなどして手を汚染し、その汚染した手で机、ドアノブ、スイッチなどに触れると、触れた場所にウイルスが付着し、汚染してしまいます。ウイルスは生きている細胞の中でしか増殖しないため、机やドアノブなどの上で増殖することはなく、環境中では状況によって異なりますが、数分間から数時間内に感染力を失うと言われています。

接触感染を防ぐには速やかに汚染箇所を消毒することや頻繁に手洗いを心がけることが必要です。手洗いは流水と石鹸を使って最低 15 秒以上行い、洗った後は水を十分にふき取りましょう。手洗い場がない場合は速乾性擦式消毒用アルコール製剤を設置し、使用する際は完全に揮発するまで両手を刷り合わせて、手洗いの代わりとします。

■ 経口感染

経口感染とは、患者や感染した動物の糞便を介してウイルスや細菌に汚染された食品や水を口に入れると起こります。

経口感染の予防は、病原体が感染している可能性のある水や食品を摂取しないこと、十分に加熱調理することです。水や食品を清潔に取り扱い、感染者は調理に従事しないようにします。

入館エチケット（手洗い・手指消毒）

博物館へ入館する際のエチケットとして、来館者に手洗い・手指消毒や咳エチケットをお願いします。

- 手洗い・手指消毒

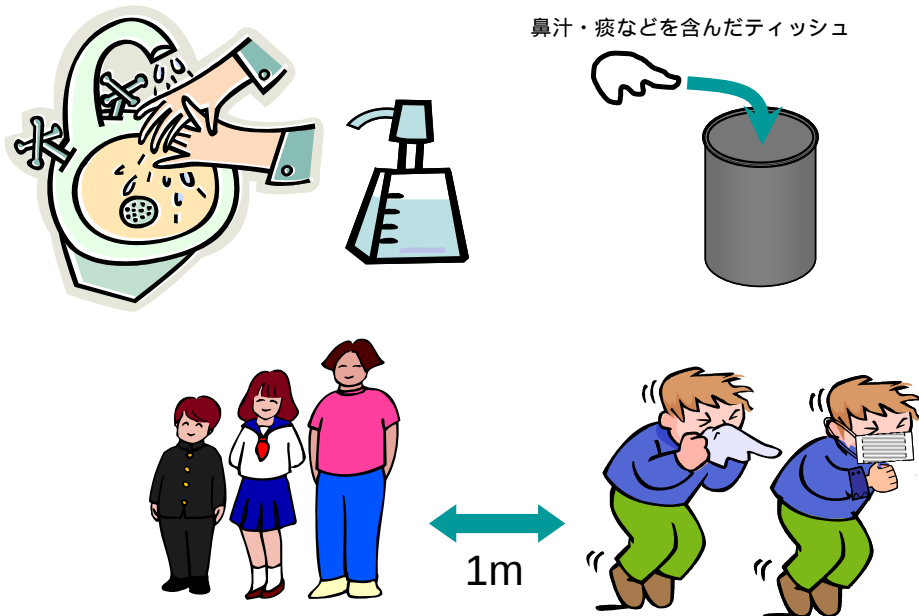
- ・石鹸による手洗いもしくはアルコールによる手指消毒をお願いします。

- 咳エチケット

- ・咳やくしゃみをするときはティッシュなどで口と鼻を被い、顔を他の人に向けずに、出来れば1メートル以上離れるようお願いします。

- ・鼻汁・痰などを含んだティッシュはすぐにゴミ箱に捨てます。

- ・咳やくしゃみが続けばマスクを着用していただきます。症状が重いようでしたら、帰宅するように勧めます。



■ 感染経路とその特徴

■ 新型インフルエンザ

・感染経路

通常のインフルエンザと同様、飛沫感染と接触感染が中心です。

・特徴

潜伏期は1日～5日（平均3日間）とされており、潜伏期間中も感染力があるといわれています。

・症状

突然の高熱、咳、咽頭痛、倦怠感、鼻汁、頭痛等

■ SARS

・感染経路

飛沫感染が中心です。

接触感染、排泄物に触れた手を介した感染（経口感染）、特別な条件下での空気感染なども完全に否定することはできませんが、可能性はかなり低いと考えられています。一部の動物との密接な接触による感染の可能性も否定できないとされており、現在までに、ハクビシンやタヌキを始め幾つかの野生動物が宿主候補として報告されています。

・特徴

感染した人で症状の出ない（発症しない）ことは稀であると考えられています。

潜伏期は通常2～10日（平均5～6日）とされています。潜伏期や無症状期における他への感染力は無いが、またはきわめて感染の可能性は低いと考えられています。

・症状

38 以上の急な発熱、咳、息切れ、呼吸困難などの症状

■ ノロウイルス

・感染経路

経口感染と接触感染が中心です。

感染した調理従事者の手指を介して汚染された食品を食べた場合、家庭や共同生活施設などで、患者の糞便や嘔吐を処理する際に、人の手などを介して二次感染した場合、ノロウイルスを含有する貝類を生あるいは十分に加熱しないで食べた場合などが考えられます。

・特徴

潜伏期間（感染から発症までの時間）は24～48時間であり、感染しても発症しない場合や軽い風邪のような症状の場合もあります。

・主な症状

吐き気、嘔吐、下痢および腹痛



(2) 対策

ワークシート あなたの館の感染症対策を考えましょう

想定している感染症に丸をつけます。

想定している感染症：新型インフルエンザ SARS ノロウイルス その他（ ）

ア. 職員、ボランティア、実習生・研修生等、来館者等が守るべきルール

○来館者や職場体験学習等の見学者の対策とルール

来館者や職場体験学習等の見学者に実施していただきたい対策、遵守していただきたいルールを記します（マスクの着用、発熱者の出勤禁止 等）。

来館者等	
------	--

○職員、ボランティア、実習生・研修生等の対策とルール

職員、ボランティア、実習生・研修生等を実施していただきたい対策、遵守していただきたいルールを記します。例えば出勤前に発熱（目安として 38 以上）や体調不良（咳、のどの痛み、全身倦怠感 等）がないかを確認し、異常があれば担当者に連絡することや各自家庭で購入・備蓄した方が良い物を整理することが考えられます。

職員	
ボランティア	
実習生・研修生等	
（ ）	

感染した職員やボランティア等が取るべき行動を記します。

職員	
ボランティア	
実習生・研修生等	
（ ）	

感染者と濃厚接触した職員の取るべき行動を記します。

職員	
ボランティア	
実習生・研修生等	
（ ）	

感染した職員および濃厚接触した職員の就業や欠勤の取り扱いはどうなりますか？

--

館園で行う対策の啓発方法は決まっていますか（館園内での掲示、チラシの配布、館内放送、ホームページ等）？特に来館者への依頼事項を明確にします。

--

イ. 準備

館で備蓄・購入する感染対策の資材はありますか？

品目	目的	準備しますか？	量
不織布製マスク	咳やくしゃみの飛沫の拡散防止 (感染拡大防止)	職員分 YES NO ボランティア分 YES NO () YES NO	
液体石鹸もしくは固形石鹸	接触感染防止の手洗い	YES NO	
消毒用アルコール製剤	接触感染防止の手指消毒	YES NO	
体温計	職員等や来館者の発熱検知	YES NO	
サーモグラフィ	来館者の発熱検知	YES NO	
漂白剤	感染者の体液等の清掃・消毒	YES NO	

ウ. 閉館

どのような状況であれば閉館するでしょうか？

博物館が原因となった感染拡大を防ぐために、自治体や国から閉鎖等の措置を求められることもあります。

--

閉館を決定した場合、来館者や館の関係者にどのようにお知らせしますか？

来館者	ホームページ・最寄駅での掲示・()
見学者 (職場体験等)	
職員	
ボランティア 実習生 研修生	
委託業者	委託業者名 () 方法 () 委託業者名 () 方法 () 委託業者名 () 方法 () 委託業者名 () 方法 () 委託業者名 () 方法 ()

閉館した場合の職員の労務管理はどうなりますか？職員の休暇の取り扱いや休業中の補償等について検討します。

I. イベント

イベントを中止するような状況はありますか？

中止するイベントは何でしょうか？

継続するイベントは何でしょうか？継続するための条件はありますか？

オ. 資料

接触感染が起きやすそうな展示（資料）はありますか？

手で触る可能性の高いものは出来るだけこまめに消毒・清掃するようにします。

想定している感染症に感染しそうな動物はいますか？人と動物の両方を守ります。

その他リスクの高い資料はありますか？

リスクの高い資料の展示は中止しますか？対策を行って続けますか？

鳥や豚など、感染症によっては感染する可能性のある動物は別の場所に隔離し、接触する人を限定します。

カ. 受け入れ

どのような状況になれば海外の研究者等の受け入れを中止しますか？

どのような状況になれば実習生、研修生、職場体験希望者等の受け入れを中止しますか？
派遣元の担当者と十分調整し、最終判断をします。

キ. 出張

どのような状況であれば職員に国内の出張を禁止しますか？その範囲はどこでしょうか？

どのような状況であれば職員に海外の出張を禁止しますか？その範囲はどこでしょうか？

ク. 海外勤務者

海外に滞在している職員はいつ、どのように帰国させますか？

海外に滞在している職員の家族は帰国させますか？

ケ. 出勤できる職員が減少した場合の対応（毒性が強い感染症の流行 等）

継続しなければならない業務とそれを行うのに必要な人数はどのくらいでしょうか。

継続が必要な業務	必要な人数	業務遂行が可能な人

（特に動物を扱っている場合）

場合によっては餌となるトリ肉等の流通が遮断されることもあるので、動物たちの餌を備蓄しておく、あるいは代替案を事前に検討しておきましょう。

コ. 関係機関との相談

清掃会社や警備会社などの委託会社が感染症流行時の対策を考えているか確認します。特に清掃会社とは、感染者の嘔吐物等の清掃などについて話しておきましょう。

	関係機関	新型インフルエンザ等のマニュアルの有無	備考
☐	清掃会社	有 無 （ ）までに作成予定	
☐	警備会社	有 無 （ ）までに作成予定	
☐		有 無 （ ）までに作成予定	
☐		有 無 （ ）までに作成予定	

また、自治体（保健所）とも相談し、その対策の内容を共有しておきましょう。

(3) 応急対応

応急対応のポイント

状況	対応
発熱・咳などのインフルエンザ様の症状があり、体調が悪くなった来館者を確認した場合 来館者が嘔吐した場合	職員はマスクを着用し、さらに体調が悪くなった来館者にもマスクをしてもらい、待機場所（他の体調不良者に感染が広がらないよう配慮します）まで速やかに誘導します。
	自力の帰宅が可能な場合は帰宅をお願いします。 無理な場合は家族へ連絡し、迎えに来るように要請します。 症状が重い場合は救急車を呼びます。
	職員もしくは清掃担当者がマスク、手袋等を着用し、嘔吐物等や接触した疑いのある館内のものを確認し、消毒・清掃します。必要な場合は立ち入り禁止や利用制限等の措置をとります。
	必要な場合は関係機関や来館者へ報告します。
感染者が来館したことが発覚した場合 館内で職員の感染が発覚した場合	職員全員の健康状態、感染の有無をチェックします。
	感染者が触れた可能性のある館内の箇所を清掃・消毒します。
	保健所等の指示に従い、濃厚接触者を特定し、一時自宅待機を検討します。 関係機関（自治体・委託先等）へ報告します。 問い合わせ窓口を開設する等来館者へ向けた情報を発信します。



(4) 事例集

新型インフル事例 1	清掃・消毒	全博物館共通
2009 年の新型インフルエンザの発生を受け、ある歴史博物館ではトイレ・授乳室に速乾性消毒液を設置しました。また、ホームページでも写真付きで報告し、来館者に感染防止の協力を求めました。手指消毒剤の配置、手すりやドアノブなど不特定多数の人が触れる箇所の消毒などを行った博物館もありました。ある考古学博物館は、職員が消毒作業にあたり、展示物に直接手が触れられる体験コーナーではより丁寧に拭くなどの対応をしました。		
新型インフル事例 2	臨時休館	全博物館共通
2009 年 5 月の新型インフルエンザの感染拡大を受け、感染拡大防止の観点から約 5 日間 - 10 日間程度の休館措置やイベントの中止、中学生以下の児童生徒に対して来館の自粛を要請した博物館がありました。休館中は問い合わせが相次ぎ、休館と知らずに訪れてしまった来館者もありました。再開後、特別展は期間を延長するなどの代替措置や再開当日の開館時間を延長したり、休館日だった日も開館とするなどの措置を行った博物館もありました。		
新型インフル事例 3	業務継続	全博物館共通
博物館が地域の観光産業において非常に重要な施設となっており、閉館を行うと館だけでなく地域全体の経済に影響を与える恐れがありました。そのため、来館者へのサービスレベルを下げることとなりましたが、対面での説明業務の中止など感染対策を万全に行った上で、閉館を行いませんでした。		
新型インフル事例 4	マスクの確保・着用	全博物館共通
2009 年 4 月の新型インフルエンザ発生後に職員用のマスクを博物館が購入しようとしたことが、品薄のためすぐには準備が出来ませんでした。職員やボランティア、警備員等もマスクの着用を義務とした博物館も多くありました。		
新型インフル事例 5	新型インフルエンザの影響	動物園
インドでは家禽に鳥インフルエンザの感染が拡大し、その影響で鶏肉をはじめとする一部食品の流通が禁止されたため、アッサム州立動物園では動物たちのエサを羊肉に変更しました。飼育員らは生のマトンや調理したラムレッグのひき肉とするなど工夫を凝らしましたが、ネコ科の動物たちはあまり食べませんでした。		
新型インフル事例 6	感染防止	国立人類学博物館(メキシコ)
博物館の入り口で来館者に、発熱やせきの有無を尋ねる質問票への記入、消毒用ジェルでの消毒、体温測定を義務付け、マスクを持っていない人にはマスクを配布した博物館がありました。		

SARS 事例 1	学芸員の派遣、受け入れ	美術館
SARS 流行の際、ある美術館では、学芸員を中国に派遣するのを延期しました。また、SARS 流行国から来た学芸員に 10-20 日間ホテルに待機してもらい、発症しないことを確認した上で美術館にきてもらいました。		

ノロウイルス事例 1	イベントの中止	博物館
2006 年ノロウイルス流行のため、餅つきのイベントを中止した博物館がありました。博物館ではありませんが、餅つき大会で手返しの水の汚染等が原因で、ノロウイルスによる食中毒が発生した事例は複数あります。		

この事例集は、報道やヒアリングより得た情報で作成致しました。

(5) 参考となるサイト

文部科学省 新型インフルエンザ対策について

http://www.mext.go.jp/a_menu/influtaisaku/index.htm

厚生労働省 新型インフルエンザ対策関連情報

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou04/index.html>

厚生労働省 事業者・職場における新型インフルエンザ対策ガイドライン

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou04/pdf/090217keikaku-08.pdf>

経済産業省 小売店舗における感染予防策などの新型インフルエンザ対策の手引き

<http://www.meti.go.jp/press/20100112002/20100112002-2.pdf>

各都道府県による新型インフルエンザ相談窓口

<http://www.mhlw.go.jp/kinkyu/kenkou/influenza/090430-02.html>

国立感染症研究所 感染症情報センター

http://idsc.nih.go.jp/disease/swine_influenza/index.html

WHO (世界保健機関)

<http://www.who.int/en/>

2. その他リスクの顕在化事例

痴漢・覗き

博物館の駐車場で、女子中学生が男から声をかけられ腕をつかまれました。

ケンカ

多数の来館者が訪れている美術館を見学中に、早く進めと後ろに並んでいた来館者が前にいた来館者に怒鳴りました。

詐欺

男が券売機に細工を行い、故障させました。さらに男は本当はお金をいれていないのに、「券売機が故障して入れた一万円が出てこない」と嘘をつき、一万円を騙し取りました。

不審者・トラブル

酔っ払い

オルセー美術館に酒に酔った男らが侵入し、モネの名画を傷つけました。裂けた部分は10cmに及びました。

スリ

動物園で動物の給餌を観察中の75歳女性が手提げから財布を抜き取られました。

対策のポイント

- ・職員間等で連絡を取り、互いに注意しあいましょう。不審者の特徴などの情報を全職員等で共有します。
- ・「こんにちは」「大丈夫ですか？」など声をかけましょう。不審者への声かけは、言葉や相手の態度に注意しながら行い、相手に近寄り過ぎないようにすることが大切です。
- ・来館者と職員等自身の安全を第一に、無謀な行動はしないようにします。
- ・ルール違反や迷惑行為があった場合は退館してもらいます。
- ・犯罪行為が確認された場合は警察（110番）に通報します。逃走した場合、無理に追いかけないようにします。
- ・ホームページ等や職員等の対応に苦情が寄せられた場合は、まず話を聞く姿勢を示し、苦情内容を正確に把握します。その場での対応が難しい場合は、館内の関係者とも連絡を取り、対応を協議します。また、クレーム情報を記録・集約して分析し、同様の苦情が寄せられないように対策を行います。

盗品

自然科学博物館で展示されていた化石が、実は海外で違法に盗掘されたものと判明しました。

寄託資料の展示

郷土資料館で、住民からの寄託資料の展示をやめたところ、寄託者から苦情がきて回収されました。

資料の盗難

動物園で獣舎の窓ガラスが割られ、プレーリードッグ5匹が盗まれました。

資料 トラブル

資料の破壊

博物館で、彫刻の頭部のみは何者かによって切断され、持ち出されました。

展示方法の模倣

科学館で行っていた展示を海外の博物館に無断で模倣されました。

対策のポイント

- ・博物館の収蔵品あるいは借用品・寄託品等、資料そのものに対する保存環境の整備や取扱いに関してもリスクマネジメントの観点から考えます。
- ・資料を入手する場合は、入手ルートが合法的なものであることを確認します。特に海外からの資料の場合は注意します。また、動植物や化石などは、国によっては海外への持ち出しが制限されているものもあるので注意します。
- ・博物館への寄託制度においては、展示を取りやめる条件や、写真撮影、印刷物への掲載の可否などについて、寄託者とあらかじめ確認しておくことが重要です。
- ・資料の盗難対策やバンダリズム（芸術・文化の破壊行為）対策としては、防犯カメラを設置したり、巡回員や警備員の目を届きやすくすることが重要です。

リスク対策のポイント

謝罪会見

災害や事故、不祥事があったときの謝罪会見において、会見内容によっては、印象をより悪くする場合があります。

●ポイント●

謝罪会見を開く場合は、事前に練習をしたり、会見内容をしっかりと練ります。謝罪会見を見たり聞いたりする一般の方に何を伝えたいのかを明確にし、情報伝達の方法を工夫します。安全に関する情報は、誤った情報が流れて混乱する前に、正確な情報を発信します。会見がどのように報道されているかチェックし、必要に応じて対応を考えます。

免震装置

美術品の免震台は地震力を8分の1から10分の1に低減するとされ、資料の転倒を防ぐのに有効ですが、揺れを完全に無くせるわけではありません。とくに縦揺れは防げないものが多いです。

●ポイント●

免震台を設置しても転倒の可能性は残るので、必要に応じて他の対策を併用します。また、特に重要度の高い用途では、上下動にも対応できる三次元床免震の導入事例もあります。

薬品の取り扱い

博物館では研究用の薬品類も保管しています。特に科学館などでは研究施設等が併設されていることがあり、そこで保管されている薬品類までは職員が広く把握していない例も多いと考えられます。

●ポイント●

薬品を大量に保管しないことや、薬品が落ちたり倒れたりしないようにする対策が必要です。また、どのような薬品をどのくらい扱っているかをあらかじめ薬品使用者だけでなく、博物館としても把握しておきます。

来館者の開館前の行列

開館を待つと並んでいる人や野外の人気のある展示物に並んでいる人が熱中症、地震等の危険にさらされることが考えられます。

●ポイント●

来館者だけでなく、開館や展示を待っている人にも配慮をし、災害時や緊急時には受け入れることを前提とした対策の立案や熱中症の予防を行います。

子どものケガ

樹脂製サンダルを履いた子どもがエスカレーターに巻き込まれて足の指を骨折する、展示の角に頭をぶつけるなど、子どもが館内でケガをする事例が多く報告されています。

●ポイント●

掲示、放送等により館内設備の安全な利用を徹底します。また、館内設備の安全点検も行います。同じ場所で何度も事故が起こる場合は、構造から見直します。事故が起きた際、応急措置ができるよう、救急箱を用意したり、職員が応急措置の研修を受けます。

職員のマナー

職員の言葉遣いや対応の仕方が悪いなど、職員が来館者に不快感を与えることがあります。また、職員が資料等を勝手に持ち出したり、職員によるハラスメントも考えられます。

●ポイント●

職員のモラル向上のために、研修を行ったり、来館者からのクレームを共有し、どのように対応すればよいか話し合いの場を設けます。資料の持ち出しや鍵の持ち出し等が犯罪であることを職員にはっきりと提示し、定められた手続きの履行を徹底し、管理を行います。何がハラスメントに当たるのかははっきり定義し、ハラスメント被害にあったときに、報告や対応をしやすい環境を作ります。

情報の取り扱い

博物館では現物の資料の他に、情報も多く取り扱っています。例えば、収蔵品に関するさまざまな情報（写真・実測図（3D計測データ）・文字データ等）や、借用品に関する様々なデータなどがあります。また、博物館資料には膨大な個人情報が含まれていますので注意が必要です。会員、イベント参加者、職員、ボランティア等の個人情報もあります。こういった博物館ならではの「情報」が漏洩されたり、悪意を持った者に不正にコンピュータシステムに侵入され、データやプログラムを改ざんや破壊されたり、災害などにより失われることが考えられます。

●ポイント●

データのバックアップをこまめに行ない、分散して保存します。
ウイルス対策ソフトを導入し、常に最新のものになるようアップデートします。
個人情報や機密情報等重要な情報が保存されている業務用端末は利用者を制限し、個人のパソコンで作業しない等、取り扱いのルールを定め、徹底します。重要な情報にはパスワードを設定して管理します。データだけでなく、紙媒体や記憶媒体の管理も気をつけます。
必要がなくなった個人情報は速やかに処分します。

3. 災害カレンダー

● 強 風 ●

屋外展示物や門扉等が風で飛ばされないよう、固定状況を確認しましょう。

● 新規来館 ●

初めて来館する児童や学生もいます。丁寧なご案内を心掛けましょう。

● 引継ぎ ●

職員等も人事異動の季節。
博物館のリスクマネジメントについても確実に引継ぎましょう。

● G W ●

連休中、多くの人出が予想されます。案内係員を増やす等して対応しましょう。



春 3 - 5月

● 梅雨・高温 ●

資料の湿気対策や高温対策は万全ですか。停電時のバックアップも備えていますか。

● 夕立・落雷 ●

突然の雨や落雷が発生時、屋外展示等における対処方法を確認しましょう。

● 夏休み ●

児童や学生の来館が増えます。案内係員を増やす等して対応しましょう。

● 花 火 ●

夜間、隣接する公園で花火の不始末等がないか、巡回を心掛けましょう。



梅雨・夏 6 - 8月

● 火 災 ●

火元の始末は完全に。放火や不審火への警戒が大切です。巡回を徹底しましょう。

● 降 雪 ●

来館者がケガ等しないよう、雪下ろしや雪掻きを行いましょう。交通情報に注意。

● 飲 酒 ●

酔った来館者への対応方法を決めておきます。職員等へ飲酒トラブルの注意喚起も。

● 休 館 ●

年末年始の休館。戸締りや資料の保管を確実に。緊急連絡網を確認しておきましょう。



冬 12 - 2月

● 台 風 ●

台風来襲時の対処方法を確認しましょう。浸水のおそれがありますか。交通情報も要注意。

● 停 電 ●

台風や落雷等で停電することもあります。停電時の対処方法を確認しておきましょう。

● 防災訓練 ●

年1回以上、防災訓練を実施します。消防署の協力を得るとよいでしょう。

● 地 震 ●

地震は何時起こるかわかりません。地震発生時の対処方法を確認していきましょう。



秋 9 - 11月